

じょうこうじ

# 掟光寺だより

令和6年  
10月号

## お寺の行事案内

●10日(木) 13時半  
「お会式・像師会」



## 日蓮聖人はどんな人？

10月13日は日蓮聖人のご入滅(命日)の日になります。1281年に現在の東京都大田区池上にある池上宗仲の屋敷で御歳61歳でそのご生涯を閉じられました。毎年その御命日の前後にはその日蓮聖人をしのぶ法要、「御会式」と呼ばれる法要を行うのが慣わしとなっています。

日蓮聖人と聞くと皆さんどんな人物を想像するでしょうか？たいいていの方が「こわい人」「激しい人」というイメージを持たれる方

が多いのではないのでしょうか。これは学校で学ぶ教科書にて、「日蓮は四箇格言で他宗を批判した」という記述があることも一因ではないでしょうか。たしかに「辻説法」と言って、鎌倉の街を行き交う人ひとりひとりに力強く布教しましたし、民衆だけではなく、また国に対しても『立正安国論』という提言書を書いて権力者に奏上され、法華経の教えお釈迦さまの教えに基づいた社会の実現を目指されました。他宗を容赦なく批判し、数々の迫害にあいながらも二度三度と立ち上がっては力強く布教する姿は間違っ

てはいません。しかしそれは日蓮聖人の一面であって、実際にはとても理性的で賢く、



とても優しくて人情味あふれる心の強い方だというのが分かります。実際に「辻説法」や「立正安国論」の奏上は当時として、現実的で合理的な方法であったと思います。また、一介の僧侶が国のトップに

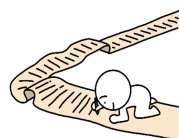
意見を言えること自体が日蓮聖人のネットワークの凄さを物語っています。ただやみくもに感情的に激しく布教されたわけではなく、「自分はお釈迦さまの教えを布教する」という目的のために一つの行動に意味があるところが日蓮聖人のすごさだと思います。

会ったこともないのになぜそんなことが言えるのかと言えば、それは日蓮聖人のお手紙が残っているからです。宗門ではこれを「ご遺文」と呼び、法要の際にお唱えします。日蓮聖人のお手紙はご真跡(本人が書いたとされるもの)、写本等を合わせて全部で340通ほど残っています。その当時同じような時代を生きた法然上人の直筆の手紙はないと言われていますし、道元禅師はほとんど手紙を書かなかったように残っていませんし、親鸞上人は43通ほどが残っているようであり、他の宗祖を比較しても圧倒的な多さです。



さらに日蓮聖人の手紙の特徴は相手に応じて文体や文章、表現をガラリと変えており、学識豊かな人には漢文体の手紙、そこまではない一般の方や女性の方には和文体で仮名書き、子どもには漢字が少なく平仮名だけ、相手が読め

そうにないかなと思つた漢字にはルビをふったり、文字が読めない人には弟子の名前を挙げて、その人に読んでもらうようにと指示するなど：一人一人内容が違います。どの手紙も相手の身になって、その人の周辺の間関係を押さえ、その人間関係の中でどうしたらその人が生きやすくなるのかという視点を忘れていないのがすごいところです。



例えば、子を亡くした母への手紙(上野殿後家尼御前御書)には、「人は生まれて死ぬという定めについては、自分でも存じていたし他人にも教えてきたが、今回のお子さんの死に際して夢なのかか幻なのか未だ分別できずにいます」とただただ大切な人を亡くした悲しみへの寄り添いが綴られており、仏法を説くことよりもまず先に、共に悲しみ、苦しむことを大事にしています。また、妻としての自信を失っていた女性信者への手紙(富木尼御前御書)には、「矢が飛ぶのは弓の力、雨が降るのは龍の力。同じように夫が成しとげる立派な行為は妻の力あればこそ」と励ます手紙も送られています。日蓮聖人の手紙について、一般向けの本も書店にあるのでご興味ある方はこの機会に一度手にとって読んでみては！